

猶、口口謂犬子爲エイヌ、猶同云々、按にエイヌトいふは、エノ節用集惠下部に、狗猶エノコ云々、崇峻紀前に、犬ウヌ云々など見えて、古言に惠奴とも、以沼とも、宇奴ともいふを、通音ならねばとて、初學の輩はおもひ惑ふめり、こはもと唸聲ウツルのウエヌノ約れば、ワンンといふより、呼し名にて、宇を省ては惠奴といひ、惠を省ては宇奴といひ、宇を通はしては以奴ともいふなりけり、武藏相摸の方言に、犬子を、イナリコといへり、そは、ウナリコの通音也、應仁別記に、旁は敵ヲ指置テイナリイナリ出ラル云々、

また骨皮左衛門道源が訪取れし時の落書に、

昨日マデイナリマハリシ道ダウケン犬が今日骨皮ト成ゾカアユキ、此いなりノは唸ウツル々也、いなりまはりは、唸廻也、犬子も唸ものなれば、イナリコとは呼るなるべし、

〔日本釋名中〕犬、いぬる也、主人になつきてはなれぬ物也、故に他所に引よせて、よき食を飼へども、もとの主人の所へいぬる也、久しくつなぎおけば、其主人になつきてかへらす、

〔倭訓栞前編〕いぬ、犬をいふ、家に寝るの義なるべし、夜を守るものなり、夫木集に、

おもひくる人は中々なきものをあはれに、犬のぬしを知ぬる、風俗通に、狗別賓、主善守禦すと見えたり、埤雅に、犬喜雪と見ゆ、諺に、雪は犬の小母オハハといふ是也、

〔嬉遊笑覽十二〕狗を犬ころといふ、犬子イヌコ等なり、また子等が犬を呼に、ころノといふ、子等來なり、狂言記續集、一むかひどの、ゑのころは、まだ目があかぬ、ころノといふ、子等來なり、

るけの焼飯を取出し、犬にみせてころノと云ふ、後撰夷曲集、宗鑑が手向に、薄ほどまた目はあかでゑのころの物に、ぎれ句の手向草哉、ト琴

〔瓊囊抄五〕人ノ踉蹌ウツラフテ不進得事之猶豫スルト曰ハ何ノ心ゾ、猶豫二字共ニ獸ノ名也、此獸疑心深シテ不進、仍人ノ有疑何事ヲ猶豫スルト云也、委細ニ申ハ猶ハイヌ也、或ハ五尺ノ大犬共註セリ、